

浜松における社会とアートの新しい関わり方の研究 —その2 龍山アートプロジェクト監修の実践経過と諸課題—

Research on the New Relationship between Society and Art in Hamamatsu : Part 2 Progress and Issues in the Supervision of the Tatsuyama Art Project

山口 貴一 デザイン学部 デザイン学科	YAMAGUCHI Takakazu Department of Design, Faculty of Design
横地 敬 デザイン学部 デザイン学科	YOKOCHI Takashi Department of Design, Faculty of Design
根木 隆之 デザイン学部 デザイン学科	NEGI Takayuki Department of Design, Faculty of Design
丹羽 あや デザイン学部 デザイン学科	NIWA Aya Department of Design, Faculty of Design
羽島 昂平 デザイン学部 デザイン学科	HASHIMA Kohei Department of Design, Faculty of Design
西山 雄大 デザイン学部 デザイン学科	NISHIYAMA Yudai Department of Design, Faculty of Design

本稿では、筆者らが監修に取り組む龍山アートプロジェクトの実践経過を報告する。本プロジェクトの舞台である浜松市天竜区龍山町は唯一あった小学校が既に廃校しており、人口減少と高齢化の進行が著しい。筆者らは、消えゆく龍山の営みを記録し「看取る」ためにアートができることを模索した。アートを単なるコンテンツとして一過性のイベントで消費するのではなく、地域住民の意識への働きかけとなるよう、交流イベントへの数回の参加やワークショップ形式での作品制作など多面的に取り組んでいる。

This paper reports on the progress of the Tatsuyama Art Project, which the authors are supervising. The only elementary school in the town of Tatsuyama, Tenryu-ku, Hamamatsu-shi, where this project is set, has already closed, and the population is rapidly declining and aging. The project sought what art can do to record and "caregive" the disappearing activities of Tatsuyama. Rather than consuming art as mere content in a transient event, the project took a multifaceted approach participating in several exchange events and creating artworks in the form of workshops, to influence the consciousness of local residents.

1. はじめに

1.1 研究の背景と本稿の位置付け

筆者（山口）は、アーティストとして作品を制作する傍ら「現代における社会とアートの関わり方の探究」をテーマに、新たなアートの可能性を模索し続けてきた。こうした立場から、前稿^{注1)}では、浜松に所縁のある素材とギミックをアート教材に込めて企画したキネティックアートワークショップ（2022年9月開催）を題材に「その1」として報告した。

続く本稿では、筆者らが協同で静岡県浜松市天竜区龍山町を舞台に取り組んでいるアートプロジェクト監修を取り上げる。中山間地域の抱える課題へのアプローチとしてのアートプロジェクトの活動軌跡を記録整理し、こうしたプロジェクトに出展者として関わるアーティストや主催者、関係者の側からもアート活用^{注2)}の事例として参照できるものとした。

なお、本プロジェクトについては既に芸術工学会2023年度秋期大会（2023年11月）にて「遠州の地域資源を活用した市民参加アートプロジェクト」（横地敬・山口貴一・根木隆之・藤石清香・西山雄大）の一事例として概要のみ紹介した。本稿執筆時点においてもイベント自体は未開催だが、全体の経過を整理しつつ、監修活動を通して浮

かび上がった課題点と展望をあげて報告とする。

1.2 龍山の現況と住民らの取り組み

龍山町は世帯数267、人口461人（2023年10月1日住民基本台帳）、平均年齢は69.69歳（2023年4月1日町時別・年齢別進行表）になる。面積の94%を森林が占め、その大半が杉や檜の人工針葉樹林である。地域に唯一あった龍山北小学校が2014年度末で閉校し子育て世代が流出、以後も人口減少の一途を辿っている。

浜松市は総務省の「地域おこし協力隊」制度等を活用して、市北部の天竜・春野・佐久間・水窪・龍山・引佐の6



図1
龍山、ぼちゃん2022会場模様



図2
2022ポスター

地域を対象にした中山間地域の支援事業を平成25（2013）年度から行なってきた。「浜松山里いきいき応援隊」（以下、山いき隊）の愛称の下に、龍山には現在2名が配置され活動している。そこに、地元出身の音楽家加わり、三氏を中心とした龍山未来創造プロジェクト事務局が発足（2021年5月）した。「地域の資産を形に残し伝える。」「関係人口を創出する。」ことを目標に掲げて活動し、主催イベント「龍山、ぼちゃん」を2022年12月2-4日に初めて開催した。旧龍山北小学校を会場に、3日間で計430名を集めた^{注3)}。（図1）

このとき、イベントを告知するフライヤー（図2）には「展示」「空間表現」「ライブパフォーマンス」「物産展」などの文字が並んだ。図1の通り、イベント会場は盛況を見せていたものの、一見では開催意図や目的が分かりづらく、企画の背骨となる一貫したコンセプトの不在が察せられた。

2. 龍山アートプロジェクトの監修

2.1 プロジェクト監修の経緯

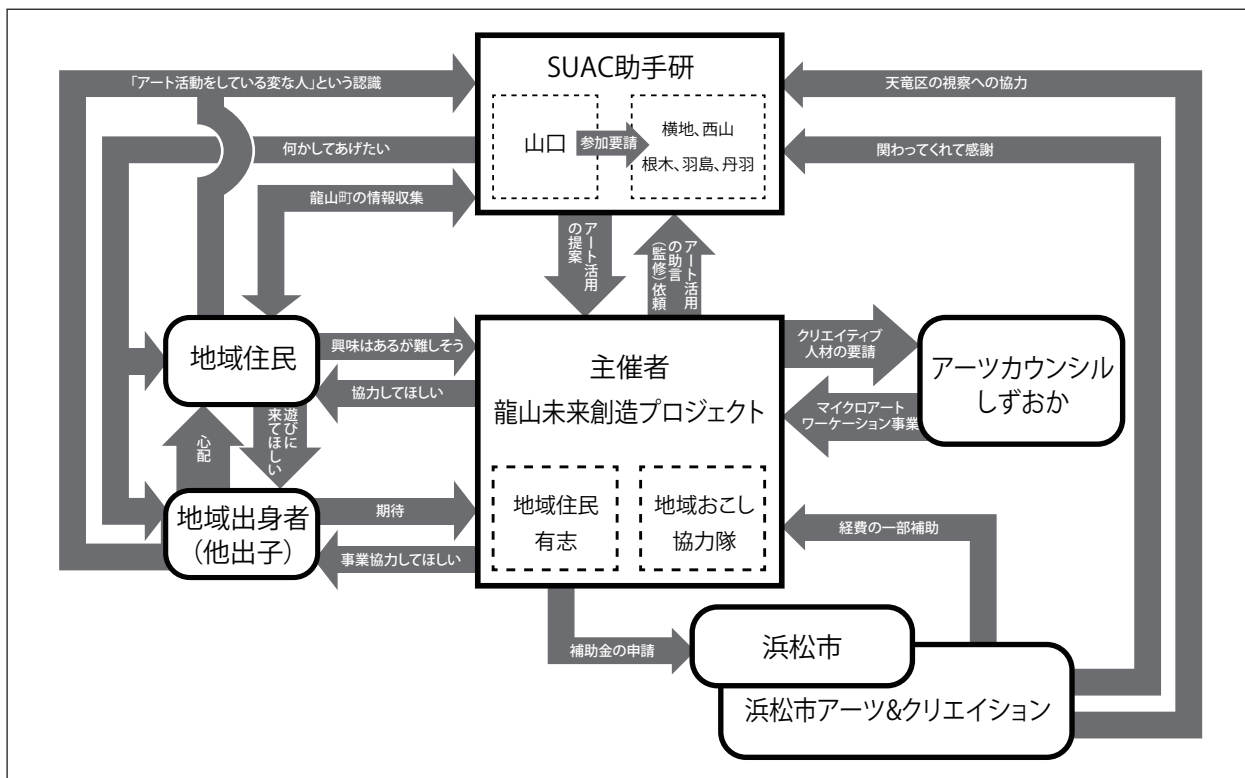
筆者（山口）は、2022年4月の浜松赴任以来、中山間地域が抱える社会的課題へのアートの関わり方を模索し、天竜区での調査を続けている。2023年5月初旬に龍山未来創造プロジェクト事務局の三氏と面会した際、アートを活用してイベントを成長させたいにも関わらず専門人材が龍山町近辺にいないと相談され、龍山アートプロジェクトの監修と前年からの連続開催を目指していた「龍山、ぼちゃん」への作品出展の依頼を受けた。「龍山、ぼちゃん」をアートイベントに趣旨転換して開催したいとの意向を受けて、町の現状とアートをどのように結びつけて表現することができるのか、を監修活動の軸に据えて取り組むこととした。

監修の手始めに、開催資金確保のための助成金申請書類作成に関与した。前年度からの継続事業のため、書類は筆者（山口）の参画時にはほぼ内容が固まっていた。主催者側が用意した企画書は、「龍山、ぼちゃん」をアートイベントとして成立させたいとの当初聞いた意向とは裏腹に、様々なイベントが満載され開催の主目的や全容を理解し辛く、趣旨が判然としないものになっていた。各種イベントの他にも、アートとは無関係な展示企画が多く予定されており、全体をアートイベントとして設定することは困難な状況だった。

2.2 監修の体制構築

6月下旬に、龍山アートプロジェクトは令和5年度浜松市創造都市推進事業補助金採択事業の一つとして採択され、「龍山、ぼちゃん」を含む数イベントの開催が決まった。予算上の制約が厳しいなかでも意欲的に提案を盛り込んだ点が評価ポイントの一つと想像されるが、結果的にそれがアート活用を難しくする要因として作用した側面もあった。助成金申請の手続き過程で浮き彫りになった課題点として、大学組織としての協賛が見送られ、かつ、主催者の期待するアートイベントとの齟齬が露呈しつつあったことがあげられる^{注4)}。同時に、「監修」の業務範囲や権限のあいまいさも顕在化しつつあった。

そこで筆者（山口）は、ワークショップ（以下、WS）形式で地域住民を巻き込んだ作品制作と展示の可能性に思い至った。本学デザイン学部特任助手に各自の専門性を持ち寄っての参画を呼びかけ、2023年5月中旬から横地・西山・根木が加わった。その後さらに、羽島と丹羽の参加を経て筆者らの取り組み体制が完成した。（図3）



2.3 監修の範囲の変化

主催者である龍山未来創造プロジェクトが助成金申請に際して掲げた活動は、下記4つである。筆者（山口・横地・西山・根木）は参加時点で、これらの総合的な監修を依頼されたものと諒解していた。

- ①「龍山アーティストインレジデンス」実施（補助金対象外事業）
- ②龍山昔話 2.0 - 新たな作画とデジタル化
- ③龍山 Wall Art - 歴史的文化資産を形に（壁画制作、3か所ほど予定）
- ④「龍山、ぼちゃん」（2023年12月1-3日開催）

なかでも③については、2023年5月下旬に主催者の案内で現地を視察し、筆者らが自ら壁画制作するための候補地（秋葉ダム東側壁面・西川橋縦壁・瀬尻簡易郵便局前壁面）を選定した。しかし、主催者側で選定されたパフォーマー1名による制作が並行して決まり、相乗効果を見込んだ3か所の展示候補地の一つが失われた。それでも、筆者らは引き続き残る壁面への制作提案を行なった。

壁画制作の実施のためには企画構想を共有し、壁面の所有者や関係自治体の許可を得る必要がある。龍山の伝統文化をモチーフにした壁画を描くだけではアート活用の意味合いが薄い。筆者らの趣旨を主催者側へ伝えるため、展示案のコンセプトを画像と文章にまとめて説明したが、同意を得られず実現に至らなかった。

その他、詳細な経緯は不明だが①のマイクロ・アート・ワークショップ招聘作家は「アーツカウンシルしずおか」によって選定されたため、筆者らは関知していない。②の事業は前年度から既に進行中であった。アートプロジェクトではアーティストのアイデンティティの尊重が最優先と判断し、筆者らの監修の対象外とした。

結果的に、旧龍山北小学校を会場とするイベント④「龍山、ぼちゃん」が筆者らの監修対象として残ったことになる。ただし、校舎の約半分は既に他の企画で使用されることになっており、校地全体を計画範囲とはできなかった。監修の範囲が徐々に縮小しつつあるなか、一貫した潜在的テーマを持つ筆者らそれぞれの作品を群的に展示することで、残された展示空間を「アート監修」できないかと考えた。

3. 空間監修としての作品制作と展示

3.1 共通コンセプトの設定

本章では、筆者らが「龍山、ぼちゃん」（図4）に向けて制作し出展する作品を紹介する。

これらはそれぞれ、龍山に関わりのある素材やモチーフに着想を得ており、龍山の人々がその風土のなかで積み重ねてきた歴史性を表現したものである。同時に、前章で言及した通り、展示会場をアート空間として成立させる構成要素でもある。

地域開催型のアートプロジェクトで制作・展示される作品の多くは、地域振興を見据えて外部へ向けて土地の魅力を発信す



図4 2023ポスター

るもの^{注5)}だが、筆者らはそれぞれの作品制作を通して、龍山町内部に向けた発信を意図している。龍山アートプロジェクトの全体趣旨「(地域の) 資産を形に残し伝える。」ことの具現化を目指すにあたって、作品制作と展示を通して地域で忘れ去られ、今では意識されることのない価値の「発見者」となり、消えゆく龍山の「看取り」^{注6)}を行いたいと考えたためである。

3.2 木と鉄で地を（山口）

・作品コンセプト

作品は、3メートルほどの高さの造形物2基と、それを囲む球体型の構成物から成る。それぞれ12本の木材が並び、地面との設置面には、金原鎌^{注7)}の刃の形態をモチーフにした金属造形物がある。これらは、人々が下刈りという林業の手作業を通して環境との関わりを持っていた様子と、下刈りの軌跡を表現したものである。（図5）

龍山町瀬尻地区は天竜区のみならず、檜の植林が最初に開始された場所にあたる。造林によって地域に大きな経済的恩恵がもたらされ、人と環境の新しい関係性の始まりとなった。人と環境の関係性は時代とともに変化するの



図5 金原鎌をモチーフとしたモニュメント完成イメージ

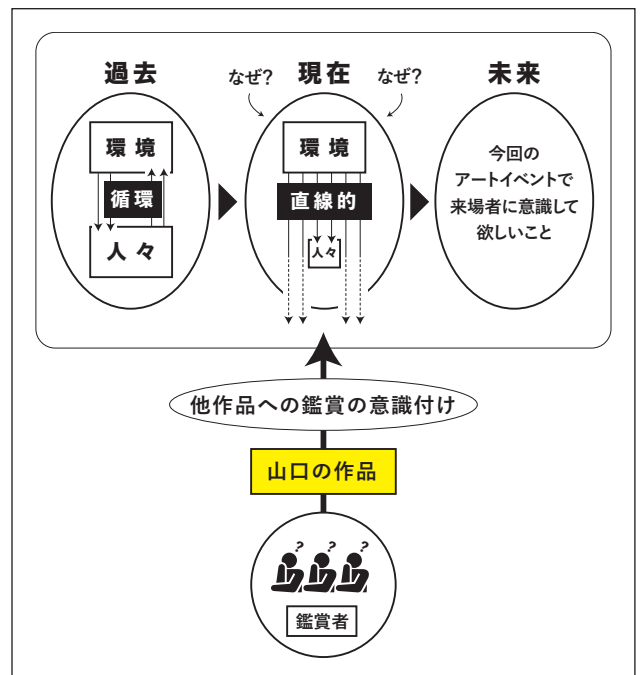


図6 展示会場のイントロダクションとしての機能

必然だが、現在は何のような関係性なのだろうか。人が居なくなりつつあるこの場所で、今一度自分が置かれた環境へと意識を向けるきっかけとなる作品としたい。

同時に、この作品は次項以下で紹介する他の作品群の、導入的な位置づけとする狙いもある。筆者（山口）の作品を始め、全ての根底には龍山の現状と地域性への眼差しがある。それぞれの作品が相互に作用するよう、本作品が展示会場における概念上のイントロダクションとして機能することで、来場者が自分の置かれた環境を意識し、あるいは展示会場全体、さらにはその外へと鑑賞の意識を拡張する助けとなり、アートを活用した看取りへの道標となる。

(図6)

・制作の経過

作品に使用する木材は全て、主催事務局を通じた地域の事業者や住民への呼びかけにより集められたものを使用している。提供先としては、龍山に暮らす人々・白倉木工所・龍山秘密村・建材店・工務店などがあげられる。龍山に様々なかたちで所縁のある人や場所から集った木材を製材し貼り合わせて長尺の部材にすることで、事務局をはじめとする龍山の人々に対し、このアートプロジェクトに単なる鑑賞者ではなく当事者の立場で参加してもらう意図がある。また、長尺木材の先端に取り付ける鎌の刃先を模した金属造形部の加工には柴田朋伽（実習指導員）の協力を得た。

球体型の構成物は、金原鎌の刃の形を模した木の造形物の集合体からなる。集合体となる事でお互いが作用し合いながら一つの形態となり、人々が金原鎌を使用して環境と共存してきた軌跡を表す。鎌部の木の加工はレーザー加工

機で行い、レーザーで木にスリットを刻むことにより、構造に反した曲げを行うことができ、その特性を応用し球状にする。制作は藤石清香（特任助手）と共同で行なっている。

3.3 天竜材と銅板のモビール（横地・山口・西山）

・作品コンセプト

龍山の景観と歴史性を、龍をモチーフとしたモニュメントで象り表現する。そこで使う地産の杉材・檜材と銅材は、いずれも龍山で積み重ねられてきた営みの象徴と言える素材である。

龍山を含む天竜地域の木材は天竜材として知られ、江戸時代中期から地域経済を支えるブランド建材であるが現在、人口減少と林業の担い手不足により手入りの行き届かなくなった人工林が土砂崩れや河川の濁りといった問題を起こしている。かつて銅鉱を産出していた日本鉱業峰之沢鉱山（1969年閉山）は地区に繁栄をもたらした存在であったと同時に、鉱毒汚染の不安や戦時増産体制下の強制労働問題など負の歴史的記憶の淵源でもある。地域住民にとって今でも複雑な存在と言える。

WS参加者が地域へ向けるそれぞれの思いを込めて刻んだ銅板を木材とともに数珠状に連ねることで、龍山の雨風を受けて絶えず揺れ動き、時とともに変化し続ける作品となる。過去から現在そして未来へと常に揺れ動きながら姿や意味合いを変え続ける山や木々とその間に暮らす人々の営みを表現することで、「かつて賑わっていたが今では何もなくなってしまった。」ではなく、自他が認める歴史と文化があるのだという住民と関係者の気付きを先導する。(図7、8)

・制作の経過

山いき隊の協力を得て地元イベントへ継続的に参加し、WSで作品の構成部材を制作した。流しそうめんやバーベキュー、といった地域交流会や例大祭の神事に参加し、その会場の一角で作品の部材となる銅板に、龍山についてのメッセージを刻むWSを開催した。(図9、10) これにより、地域住民の本作品への共感や理解が深まった。コミュニティの内部と外部を取り持つ中間的な存在を介したコミュニケーションは、同様の地域的なアートプロジェクトを行う際にも重要なプロセスの一部になると考えられる。

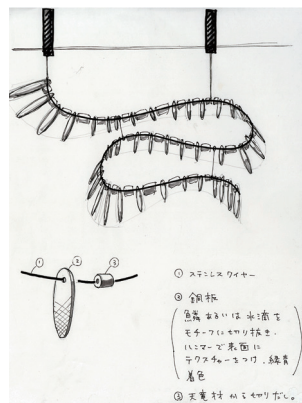


図7 モビールのエスキス



図8 モックアップ(部分)



図9 ワークショップの一幕



図10 銅板への刻印



図11 天竜杉のカンナクス



図12 カンナクスを織り込む

3.4 天竜材を使ったテキスタイル (丹羽)

・作品コンセプト

天竜区龍山町瀬尻の里山の景観の大部分を占める針葉樹林は人工的に造られたものである。ここから産出される杉材と檜材は「天竜材」として知られ、建築資材や家具材として広く利用されている。

今回は、その製材過程や材表面の仕上げ工程において発生する樹皮やカンナクズに着目した。(図11) 通常は単なる副産物と見做されるものをテキスタイルに織り込むことで、見慣れた素材である天竜材の魅力を再発見するきっかけとする。鑑賞者が作品に触れ、編み込んだカンナクズ同士がすれて奏でる音を聞くことで、龍山の人々に故郷の風景を五感で感じてもらう狙いがある。

木材を量塊として使用せず、紙のように薄くすることで初めて纏う質感や手触りをそのままテキスタイル作品として構成する。縦糸にリネンとコットンのスラブ糸^{注②)}を使用し、横糸として薄いカンナクズを織り込むことで、それぞれの素材が本来持つ柔らかさと軽やかさをさらに引き出し相乗させた表現となる。

・制作の経過

本作品の制作手順は以下の通りである。スラブ糸や、厚みや幅の不均一なカンナクズ、樹皮を一枚のテキスタイルに織り込むことで、それぞれの素材が持つ質感や表情の違いを感じられる作品となる。

- ① 龍山町の工務店や建具店の協力を得てカンナクズを集める。または、杉や桧の丸太材から薄皮を削り出し、その薄皮を水に晒す。
- ② 乾燥により曲がってしまった部分や、巻いてしまった部分を伸ばして乾燥させ、織り込みやすく処理する。削り出した薄皮の部位によっては、アルカリ性薬品の

水溶液に晒し、柔らかくする処理を施すことで織り込んだ時に皮が砕けるのを防ぐ。

- ③ 縦糸にリネンとコットンを撚って作った糸を使い、横糸に木材から削り出した薄皮を織り込み、平織で織り上げていく。(図12)

このタペストリー状の作品を教室の天井からテグスで吊り下げて展示する。人の動きや風など微かな空気の流れで絶えず揺れ、窓からの光を半ば透過させて床面に柔らかな影を投げかける。距離を置いて眺めるだけの従来形式の作品展示ではなく、作品と鑑賞者の間にはアクリル板やロープパーティションなどの仕切りを設けない。光の透過を見て、表面を直接手で撫で、木の香りを感じ、風に揺れて素材同士が擦れる音を聞くなど、五感を通して知覚できる展示空間とする。

3.5 天竜材で作ろう！みんなの紋様アートワークショップ (羽島)

・作品コンセプト

龍山という緑豊かな地域での経験が参加者の手に残るイベントを実施したいと思い、WS形式での作品制作を企画した。龍山に所縁のある木材を使うことで、後日その時の情景を思い出す記憶のトリガーとなる。龍山という場所がアートを通じて人々の記憶を媒介として広がっていく。

アートWSの事前準備として、木材を板状に切り出し、レーザーカッターで単一形状に切り抜き、裏面に磁石を接着したピースを400枚程度用意する。(図13、14) その表面に、参加者にマーカーで自由に着色・装飾して貰う。(図15) アートをもっと身近に感じ体感してもらうために、特別な技術や加工法ではなく、何気なく線を描く、使いたい色で塗るという行為だけで、自分の想いを形に遺して貰う。一つ一つのピースは小さなものだが、参加者全員が集合的に作り上げる一つのアート作品になる。

当日、参加者には2枚一組の木ピースを配布し、一枚は



図13
龍山産の丸太の製材

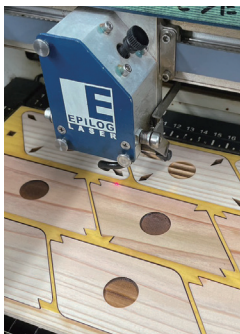


図14
ピースの切り出し



図15
木ピース表面への着彩

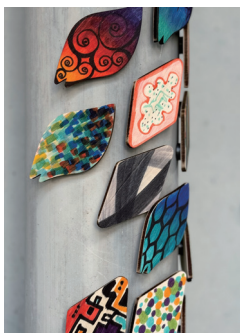


図17
鋼管への貼り付け例

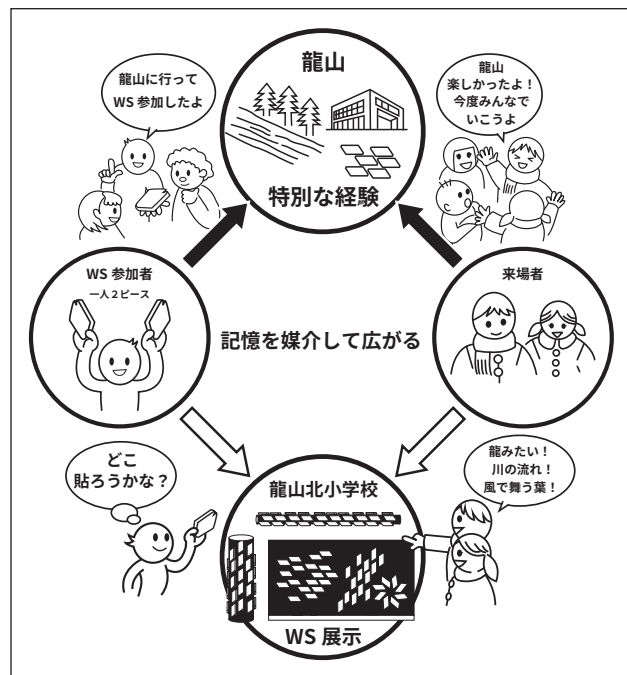


図16 天竜材のピースを媒介とするWSの枠組み

完成後に持ち帰り、もう一枚は会場内の磁石がつく黒板や鉄扉などに思い思いに貼り付けてもらう。一方を会場に遺すことで、その場に来て作品を見た人の記憶として残り、龍山という場所を訪れて体験したことの痕跡になる。持ち帰る木ピースはアートイベントを振り返るきっかけとなり、龍山の存在を記憶に遺すことができる。

展示場内に設置するものはアート作品の一部として構築され、次に訪れる来場者へと作品のバトンが繋がっていく。(図16)

・ 展示計画

ペイントを終えた参加者のピースが少しずつ集積することで、見る人の主観で感じる別の作品へと昇華していく。貼り付け方によっては龍に見えたり、風で舞う木の葉のように見えたり、川の流れるように見えたりと、来場者の感じ次第で幾通りもの解釈が成り立つ。

木ピースの貼り付けは磁石で張り付く場所ならどこでも可能であり、平面の壁(黒板)から設備配管などの鋼製パイプや手すりなどが考えられる。とくに、曲面に貼ると木板が平面形状であることも相まって円筒のパイプが幾何学模様のような多面体構造へと姿を変える。曲面の曲率の大きさによって平面の向きや角度なども変わっていくため、普段見慣れない多面形成アートオブジェに変貌する。(図17)

参加者それぞれが、前の参加者が貼った木ピースに対して「自分のものをどのように貼り付けるか。」を鑑賞し選ぶことで、制作者として参加することができる。全体像がリアルタイムで変化する生きた作品制作・展示の一部として、来場者を取り込み当事者化する意図である。

3.6 龍山の記録映像(根木)

・ 作品コンセプト

筆者(根木)は、遠からず失われていく「現在」の龍山の姿を、視覚・聴覚情報として時間軸ごと切り取り、映像アーカイブとして作品化することを試みている。龍山を被写体とするにあたり、高齢化による人口減少で、現在まで続いてきた龍山の人々の営みが消えつつあること、また、それに伴い地域の景観が否応もなく変容していくことに目を向けた。映像表現には「時間軸を内包する。」という他の表現技法にない特徴もある。「現在(2023年7-11月)」の龍山の風景、そこに暮らす人々の姿、さらには山いき隊をはじめとする、龍山で活動する関係者の姿を包括的に撮影し、記録するため「時間軸を切り取る。」というコンセプトを設定した。

映像という表現手法は、誕生から100年あまりの歴史の中で、常にアーカイブとしての有用性^{注9)}を示し続けてきた。メディアの発達により映像アーカイブズへのアクセスが容易になる^{注10)}ことで、映像記録に対する解釈が、より多様化すると予測できる。

このような流れの中で、筆者(根木)は本作品を単なる記録映像ではなく、解釈の「手がかり」を内包したものとなるよう試みている。龍山の住民や山いき隊の人々に対し、台本や打ち合わせを可能な限り省いた状態で即興的にインタビューを行い、龍山という地域に対する考えや印象を本人の言葉で話してもらった。「現在」の龍山に関わる人々の行動や発言を手がかりとして、鑑賞者がそれぞれの視線から読み解ける映像作品としたい。そのため、編集の際には、

エフェクトやグラフィック等の挿入は必要最低限とし、被写体となった人たちが撮影中の筆者に語りかけ、そこから会話が生起するカットも採り入れた。撮影者がカメラを通して一方向的に龍山の姿へ眼差しを向け、単なる素材として編集するのではなく、撮影という行為もまた「現在」の龍山の営みの中に内包され、影響しあっていることを表現した。

・ 制作の経過と展示計画

2023年7月より断続的に龍山を訪れ、天竜川やその両岸に広がる針葉樹林、茶畑などの風景と、人々の様子を数度にわたり継続的に撮影した。(図18、19) また、龍山未来創造プロジェクトが主催する地域のイベントにも都度参加し、イベントの様子や関係者へのインタビューを撮影記録し^{注12)}、1本の動画として編集した。(図20、21)

展示については、鑑賞者が「映像作品を観る。」という行為の形式的な先入観に囚われることなく、それぞれの視点で自由に鑑賞できるように意図している。本映像作品に限



図18 針葉樹林の撮影記録



図19 例大祭の撮影記録

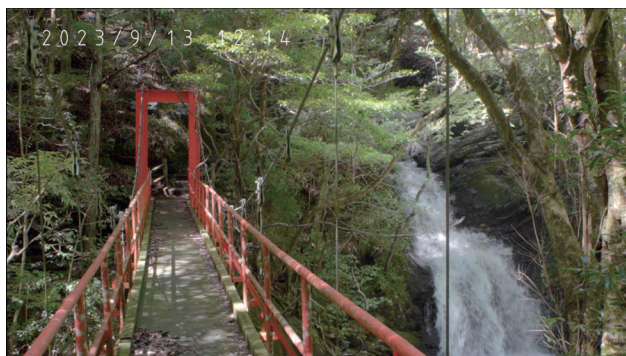


図20 龍山の風景の記録カット



図21 山いき隊の二人へのインタビューカット

らず「体験を通して、参加者に龍山の魅力を再発見してもらおう。」という、本プロジェクトに通底するテーマの反映を試みたい。

映像の上映は13.3インチのモニタをスタンドに立てて行う。固定の上映時間を設定せず、映像はループ再生されるようにし、スクリーンや大型のモニタに一齐に向かって映像鑑賞するのではなく、小型のディスプレイを点在させて上映することで、来場者が移動中にふと足を止めて、画面を覗き込むようにして鑑賞できるよう計画している。鑑賞者を大画面に対峙させるのではなく、一人一人が小窓に切り取られた風景を眺めるように展示する。

本作品の撮影は本章各項にて述べられた他作品の材料調達や、現地調査の合間にも行っており、プロジェクト全体の進行と深い関係性がある。偶然に映り込んだ筆者ら自身の姿や声も作品に組み込むことで、本作品が龍山アートプロジェクト「龍山、ぼちゃん」における筆者らの取り組みそのものの映像アーカイブとしての側面を持つよう意図している。

なお、デジタルアーカイブとしての保存や活用の具体的手法については、今後の検討を要する^{注11)}。

4. まとめ

本稿では、筆者らが監修する龍山アートイベントの実施経過、地域課題へのアートの関わり方、その意義と浮き彫りになった幾つかの課題点を記した。

本プロジェクトで特筆すべき点は、遠くない将来無くなってしまふことが予想される地域を対象とすることにある。そのため筆者らは、消えゆく地域の営みや、忘れ去られ意識されなくなった価値の「発見」への先導役となるよう、アートを活用した「看取り」に取り組んだ。

第2章で言及した通り、今回の監修・作品制作の過程で、アートに求めるものの違いから筆者らと主催者との間に認識の乖離や齟齬が度々生じた。そもそも「監修」の果たすべき役割も最後まで共通認識には至っていない。筆者らの今後の活動体制の構築や学外機関との協働のあり方を考える上でも大きな課題である。

一方で、前述した山いき隊と地元出身者からなる主催事務局の協力による成果も多くあった。例えば、3.3のモバイル制作のWSでは、事務局の説得によって「アートは分からないが、あんたらが言うんだったら取り敢えずやってみようか。」と言って参加してくれた地域住民も少なからずいた。他の作品の材料調達においても同様で、事務局を通じた地域の事業者や住民たちの好意により必要量を賄うことができた。

筆者ら(山口・横地・西山)が龍山でのリサーチを開始した2023年5月、地域の住民に会うたびに「何もないところに一体何をしに来たのか。」と訝しがられた。「龍山、ぼちゃん」を中心とする筆者らの取り組みが、そうした住民たちが自ら生きる地域をこれまでとは違う目で見、一つのきっかけになるよう願う。

謝辞

龍山町での活動にご協力頂いた全ての皆様に感謝申し上げます。

注

- 1) 山口貴一「浜松における社会とアートの新しい関わり方の研究—その1 ワークショップでの試み—」『静岡文化芸術大学紀要』第23号、pp. 127-144、2022.3。教材開発は横地敬(当時・実習指導員)・藤石清香(特任助手)との共同で実施した。また、ワークショップ開催後には、アート教材の背景にある浜松の地域資源の解説を盛り込んだ動画教材「素材とギミックで浜松を知る・体験する!キネティックアートワークショップ☆」の作成に根木隆之(当時・実習指導員)と共同で取り組んだ。(公益財団法人学習情報研究センター主催 令和5年度第39回「学習デジタル教材コンクール」佳作入選)
- 2) アーティストは、より多くの言葉にならない(またはできない)事柄を、コンセプトやメッセージとして作品に込めて形にすることができる。そして、その作品は社会に対し何かしらの影響を生じさせることがある。本稿で述べる「アート活用」とは、作品制作の背景に向けられたアーティストの視線を借り作品制作に間接的に参画することで、住民が「当事者」として地域に関わることを意味する。
- 3) このイベントは令和4年度浜松市創造都市推進事業補助金採択事業の一つであり、常葉大学造形学部蜂谷研究室が共催として加わっていた。筆者(山口)が現地視察した際は、地元物産の販売や瀬尻ぶか風保存会が講師となる風づくり体験、蜂谷教授や研究室ゼミ生による作品展示などが行われており、地元住民が協力してイベントを手作りしている温かみのある雰囲気は印象的だった。集客数もローカルなイベントとしては十分ではないかと考えられる。
- 4) アートプロジェクトとして本格的に始動させるためには筆者(山口)個人の関わりでは不十分だと考え、本学の地域連携室に協力依頼をするよう主催者に提案した。しかし、企画書の段階でアートを活用した取り組みの趣旨が不明確だったことや予算上の理由から2023年度の産官学連携は実現しなかった。
- 5) 事例としては、鞍掛純一+日本大学芸術学部彫刻コース有志「脱皮する家」(第3回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ、2006)、半田真規「無題(C邸の花)」(瀬戸内国際芸術祭2019、2019.7)、形狩りの衆(代表山本直)「ひとつになる先輩たち」(UNMANNED 無人駅の芸術祭/大井川2023、2023)などがある。
- 6) 「看取り」は、5月中旬の筆者ら(山口・横地・西山)と龍山未来創造プロジェクトの鈴木のみ(2022年度代表)との対話中に登場した言葉である。筆者らはそれを、彼らが掲げる「龍山の未来を繋ぐ」ことの長期的な着陸点を示したものと理解している。アートによる「看取り」を掲げた実践例には、なごやヘルスケアアートマネジメント推進プロジェクトが紹介するヘルスケアアートがある。これは、ターミナル・ケアの一環として「看取りケアをアート視点でとらえプランニングし実施」するもので、個々人が己の人生を振り返り、死と向き合うための装置としてアートを利用している。筆者らの活動は「緩慢に死にゆく地域」を出発点に展開するもので、死を終着点とするヘルスケアアートの取り組みとは文脈が異なる。(https://healthcareart.net/news/event/entry-227.html、参照2023.11.30)
- 7) 金原明善(1832-1923)が林業の労働効率を上げるために鍛冶職田中茂助に制作させた独自の刃形状をした長柄の鎌。
- 8) 意図的に細い部分と太い部分のムラを作った糸のこと。
- 9) 代表的な映像作品としてConstant Girel(1873-1952)とGabriel Veyre(1871-1936)による*Constant Girel au Japon (1897-98)*がある。ここでは、東京の街頭風景などが撮影記録されており、現在では失われた街並みや人々の営みが窺い知れる。
- 10) 国立映画アーカイブ「フィルムは記録する—国立映画アーカイブ歴史映像ポータル—」(https://filmisadocument.jp、参照2023.11.8)
- 11) 本作品を映像アーカイブとして位置付けるには、電子データの互換性など保存の点を考慮する必要がある。本学の図書館・情報センターなど公的機関への寄贈や委託を含む様々な保存と公開の方法を検討している。
- 12) インタビュー動画の撮影にあたっては事前に被撮影者に許諾を得た。また山いき隊の主催イベントでは、参加者ならびに主催者側の許諾を得た上で撮影を行った。

出典

- 図1 龍山未来創造プロジェクトより提供
- 図2 龍山未来創造プロジェクトより提供
- 図3 筆者（丹羽・西山・山口）作成
- 図4 龍山未来創造プロジェクトより提供
- 図5 筆者（羽島・山口）作成
- 図6 筆者（山口）作成
- 図7 筆者（横地）作成
- 図8 筆者（西山）作成
- 図9 筆者（西山）作成
- 図10 筆者（西山）作成
- 図11 筆者（丹羽）撮影
- 図12 筆者（西山）撮影
- 図13 柴田朋伽（実習指導員）撮影提供
- 図14 筆者（羽島）撮影
- 図15 筆者（西山）撮影
- 図16 筆者（羽島）作成
- 図17 筆者（西山）撮影
- 図18 筆者（西山）撮影
- 図19 筆者（西山）撮影
- 図20 筆者（根木）撮影・作成
- 図21 筆者（根木）撮影・作成